

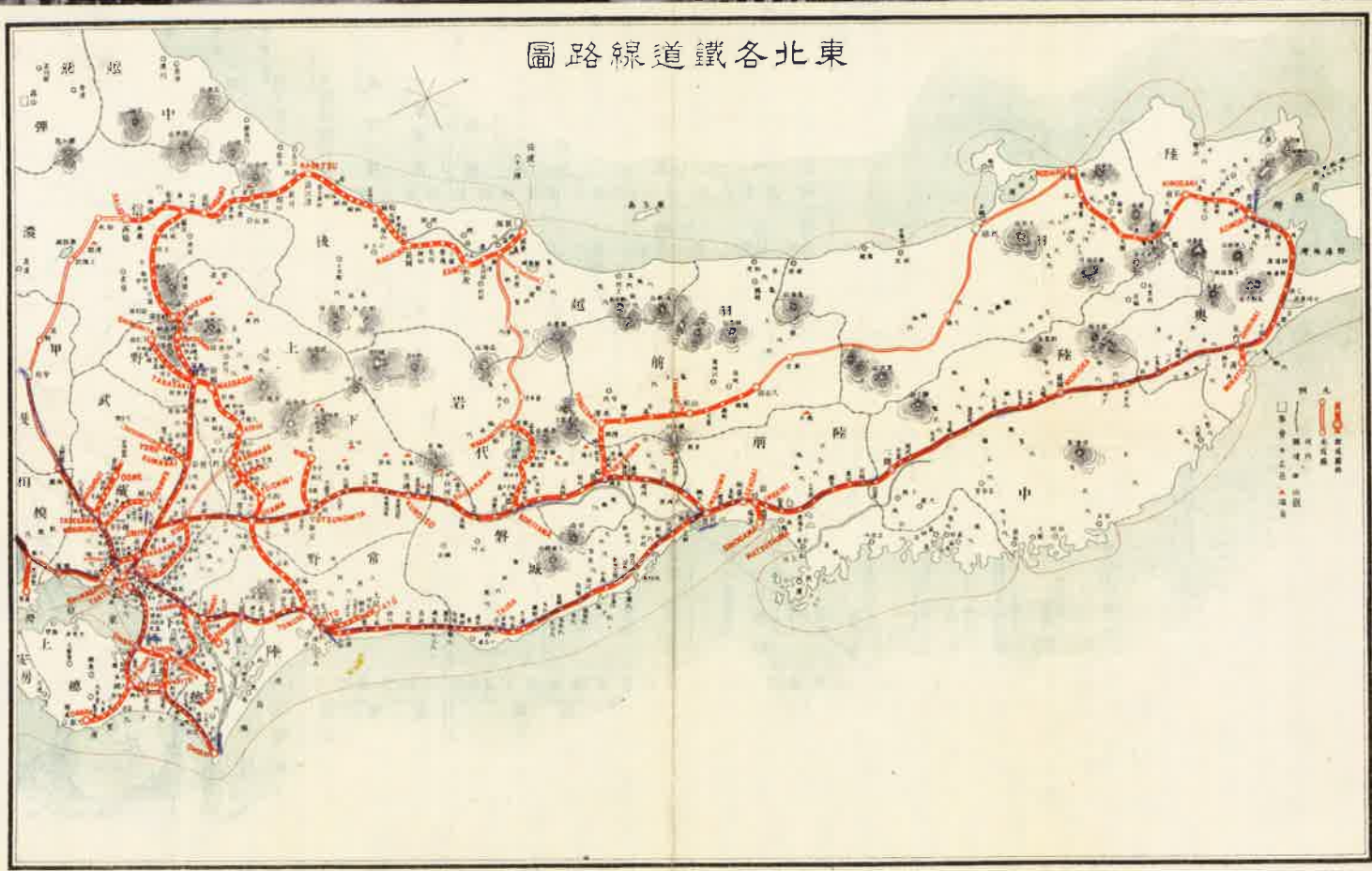
会津若松



弘前



東北各鐵道線路圖



仙台



岩手



目次 ● 巻頭コラム「西周と鷗外の懐をめぐって」榊山紘一(印刷博物館館長) / 展示報告 / 次回展示のお知らせ 特別展「鷗外と旅する日本」 / 展示会場から / ショップ便利 / カフェ便利 / 地域情報 / コラム「文学は誰のものか?—文化資源の活用と地域連携」石田仁志(東洋大学教授) / これからの催しもの / 活動報告 / 2018年度前期 開館カレンダー / 編集後記

西周と鷗外の懐をえぐって

樺山紘一（印刷博物館館長）

いま「西周」と書くと、多くの東京人たちは「せいしゅう」と読むかもしれない。中国古代の王朝名として、始皇帝のライバルとも言いたるだろうか。

正しくは「しあまね」という日本人。かつては相当に高名であり、明治維新と文明開化における知的・行政的リーダーとみなされていた。徳川幕府の崩壊と大政奉還に立ち会って、將軍慶喜の相談相手とされた。明治新政府となってからは、重要な顧問役をつとめ、また啓蒙家たちの同人誌『明六雑誌』のおもな寄稿者であった。

それほどのキーパーソンであったものが、なぜか第二次世界大戦のあとには、少しずつ評判を落とし、忘れられかけてしまう。明治初年に「軍人勲論」の起草にかかわったことから、軍事と戦争への親和性をこたげられて、忌避されたからか。または、政治・法学の草分けとして、明治政府の権威体制にあずかるころ厚かったからか。どちらにしても、20世紀後半の日本では、知識人の所作として、軍事や体制はあまりに不評だったのだ。

ところが、世紀も替わるころから、西周をめぐる風向きは大きく変化しはじめた。右も左も察知できない明治初年の官界に、確実で明快な指針をあたえた国際派理論家

として。あるいは、当代最高の知性をもってヨーロッパ学問の深奥を的確に伝達し、無数の若者を未来にむけて旅立たせた教育者として。

そうした評価の変化には、西周の身邊・人事への理解もかわっていっただろう。西周は、石見国津和野で1829年に生まれた。同郷の森鷗外は近縁だが、西周は一世代ほど年長。津和野にある鷗外の生家、つまりその記念館から、もの数分の距離津和野川の対岸に西周の旧家がある。時をへだてて、ともに江戸・東京に出た二人の親戚同士というわけで、鷗外（林太郎）は、西周宅に寄寓して、波乱の時代を生きた。1897（明治30）年に西周が没したとき、追悼の伝記を執筆したのは、文名もあがった35歳の森鷗外その人である。

鷗外との縁ばかりではあるまい。明治初年、つまり19世紀の後半という国際的にも険しい世界情勢のなかで、若い夢をあたためる近代日本に、揺るぎない明察をあたえつづけた西周に、ふたたびまばゆい光が当たりはじめるのは、しごく当然のなりゆきといつてよい。盟友であった福沢諭吉や榎本武揚らとならんで、西周の存在の正確な把握が、いまようやく試みられようとしている。おそらくは、この激しいグローバル

化の時代において、かつて堅固な足場を築いた19世紀人の事蹟が、かけがえのない標識を示してくれるかに見えるからであろうか。

もつとも、それほどにあらたまった議論をするまでもなく、わたしたちはいま、西周への平易で聡明なアクセス路を手にすることができるとは、21世紀になって、「西周ルネサンス」とも言えそうな、再評価運動がはじまっていること。それまで、入門書から専門書まで、あまりにも手薄だった参考書目録に、いくつもの労作・秀作が加わった。幕末から明治まで、起伏にとんだ西周の人生や論議を、公正にしかも広角から論じようとする論著があらわれた。もう、軍事や体制だといって毛嫌いなような短見は影をひそめ、実像や活動を広い視野で捉えようとする態度が、しごく当然のものとして受けいれられている。

なかでも、西周が明治3年というきわどい時期に、新首都・東京の私宅にもうけた私塾・育英舎での講義が脚光をあびている。この講義は、若い俊英たちを募って、西周が欧州で学んだ学問の総体を逐一解説したものだ。いまのことばで言えば、社会・人文・自然科学の当時の姿を、すべてにわたって概観した。そのタイトルは、「百学連環」という。英語のエンサイクロペディアの邦語訳である。現在の訳語ならば、「百科辞典」。たつたひとりで、百科辞典を解説・講義した。そんな途方もない挑戦を、西周はさらりと達成してみせた。後にも先にも、近代日本ではほたただひとつの業である。

いま、この講義録が、たいそう話題になっている。あらゆる知識がみな細分・専門化され、ひとつひとつの断片のつながりが見

失われているいま。そのなかで、「百学は連環する」という宣言が、たとえようもない新鮮味を發揮している。ほうぼうでこの宣言は引用され、命名に利用される。現実には厳しいが、それでも「百学連環」は理想として、現代人を挑発してやまないかのような。

この育英舎講義録は、聴講者のノートをもとにして、はるかその昭和19年にはじめて編集・公刊された。また、昭和31年には『西周全集』の第4巻として再版されたが、残念ながらいまではとくに人手困難である。とはいえ、「西周ルネサンス」をうけて、旧全集の改訂が計画され、近く刊行の予定だという。西周を根底から再認識できる日が近づいている。

さて、そればかりではない。いくらか専門家向きの動きにみえる『西周ルネサンス』はともかくとして、西周その人の人格的魅力をも如上に乗せる試みが目につく。森鷗外と西周をシンボルとして、その生地、石見・津和野と奇しき縁で結ばれたいまひとつの町とが、相謀って日本の近代人の魅力を再吟味しようとする試み。千キロちかくも隔たつたふたつの町を結んで、文京区の森鷗外記念館と、津和野町の森鷗外記念館とが、あい携えてこの運動の先駆けを果たしている。振りかえってみれば、鷗外はもとより、西周もまた明治の本郷・小石川、つまり現今の文京区と、それなりの結び目を作っていたではないか。

この偉大な先人たちの事蹟を追いもめながら、文京区は日本や東京の未来のことばを想いながこうとする。そのときにはもう、だれも誤りなく立派に「しあまね」と音読できることになるはずだ。

展示報告

コレクション展

「鷗外・ミーツ・アーティスト——観潮楼を訪れた美術家たち」

会期：2018年1月13日(土)～4月1日(日)

鷗外の日記を紐解いてみると、鷗外の旧宅・観潮楼(現・当館)には、たくさんのお客さんが訪れていたことが記されており、鷗外が美術に造詣が深いことを物語っています。「鷗外と美術」というキーワードからまず思い出すのは、洋画家・原田直次郎でしょう。当館では2013年度に原田の特別展を開催し、その業績と鷗外との交流を顕彰しています。本展では、あえて原田以外の美術家に着目しました。洋画家、日本画家、彫刻家と分野は異なり、年齢も鷗外と同世代だけでなく親子ほどこに歳の離れた者もいて、鷗外との関係性も様々な10人の美術家たちです。

展示を「鷗外が見つめた美術家たち」と「美術家たちが見つめた鷗外」の2部構成とし、双方に向けた眼差しを示す館蔵資料を展覧しました。「鷗外が見つめた美術家たち」では、文京区ゆかりの洋画家・藤島武二をはじめ、大下藤次郎、岡田三郎助、久米桂一郎、宮芳平を取り上げました(いずれも洋画家)。美術家をモデルとした小説(ながし『身上話』『天龍』)や美術批評など、鷗外が紡ぎ出した言葉からは鷗外の美術家たちへの理解と尊敬が垣間見えます。

一方、「美術家たちが見つめた鷗外」では、彫刻家の高村光太郎と武石弘三郎、洋画家の長原孝太郎と中村不折、日本画家・平福百穂に焦点を当て、彼らが描いた鷗外のカリチュア、鷗外著書を華やかに彩った装丁本などを紹介しました。鷗外のカリチュアは、写真だけでは伝わらない、鷗外の飾らない素顔を写し出しているようにも思えます。

この他にも、鷗外旧蔵の岡田や宮の絵画、不折の書が、展示会場内に華を添えました。鷗外の長男・於菟によると、いずれも観潮楼に飾られていた作品だといえます。鷗外の日常の中にも、「美術」が寄り添っていたのでしょう。

互いの活躍の場は「文学」「美術」と異なりましたが、日本近代という激動の時代において作品を生み出す創造者であるという点では、まさに同志であったのかもしれない。本展で紹介した資料の数々から、互いの親愛の情が浮かび上がってきたように思いました。

会期中、関連講演会として児島薫氏に、鷗外が洋画家としていち早く評価した藤島武二について、明治期の洋画界を軸にしなから、鷗外との交流やその画業をお話しいただきました。

「鷗外が囁望した洋画家藤島武二」
日時：2月24日(土)14時～15時30分
講師：児島薫氏(実践女子大学教授)

主な寄贈図書一覧(2017年1月～12月)

左記の貴重な資料を文京区立森鷗外記念館にご寄贈いただき誠にありがとうございます。鷗外研究のための貴重な資料として、未公開・活用させていただきます。

【著者寄贈】

『MUSEUM』東京国立博物館研究誌 666号 東京国立博物館 2017年2月 *「大正期の正倉院拝観資格の拡大と帝室博物館総長森鷗外」田島哲著収録
『青年』森鷗外著 須田喜代次注・解説 岩波書店 2017年4月(岩波文庫)

沼倉延幸著「図書館森林太郎(鷗外)に関する基礎的研究」宮内公文書所蔵資料を中心として(『書陵部紀要』第68号) 2017年3月(抜刷)

森まゆみ著「暗い時代の人々」垂記書房 2017年5月
丸井重孝著「不可思議の探検者」木下幸太郎 観潮楼歌会仲間たち 短歌研究社 2017年10月
山崎 顕著「森鷗外論叢書」おうふう 2017年9月
宮川公男著「統計学の日本史 治国経世への願い」東京大学出版会 2017年9月

山本勉著「静岡黎明期の英語教育と浜江保」(『中国言語学研究』第17号) 2017年8月(抜刷)
山本勉著「明治時代の著述者 浜江保の著述活動」出版部万国戦史を中心に(『佛教大学大学院紀要 文学研究科編』第43号) 2015年3月(抜刷)
伊藤比呂美著「切腹考」文藝春秋 2017年2月

【発行所寄贈】
『清張が描いた日本の近代 豊穡なる小説群』北九州市立松本清張記念館編 2017年1月
『野田幸太郎 散歩の愉しみ』(ハンの会)から文学散歩まで 町田市民文学館とこぼらんど編 2017年1月
『島根県立石見美術館研究紀要』第11号 島根県立石見美術館 2017年3月 *「森鷗外」日記の挿絵画家 藤原緑子について 左近亮画業著 収録
『佐佐木信綱研究』第7号 大正期の信綱特集 佐佐木頼綱編 佐佐木信綱研究会 2016年12月
『森鷗外記念館報 ミュージアムデータ』21 森鷗外記念館 津和野 企画・構成・発行 2017年3月
『千ヶ崎梯六』与謝野晶子を支えた足立の歌人画家 足立区立郷土博物館編 2017年3月

『長原のブックデザイナー』挿絵の子カラ、装丁の美』タルヒニアセンター編 2017年10月
『野田幸太郎』激動の時代を駆けぬけた編集者』野田幸太郎文学資料館編 2017年(8月)
『子規から虚子へ』近代俳句の夜明け』虚子記念文学館編 2017年3月
『桐光学園』文芸部誌 第21号 桐光学園文芸部 2017年9月 *「森鷗外」ちいさなあざん」研究 歴史離れの目的とは何か』ほか収録
『近代作家の基層 文学の生成と再生』序説』半田美水著 和泉書院 2017年3月
『模倣と創造 哲学と文学のあいだで』井戸田総一郎 大石直記 合田正人著 書肆心水 2017年3月 *「森鷗外と近代的表現へのアクチオナルな問い」伝承と自由と、あるいは、ミメーシスとポイエーシス』と大石直記著 収録
『湖村詩存』桂湖村著 村山吉廣編 明徳出版社 2017年3月
『明治文化全集』第1巻28巻、別巻ほか全31冊 明治文化研究会編 日本評論社 1992～93年 復刻版
『皇后の肖像 昭憲皇太后の表象と女性の国民化』若桑みどり著 筑摩書房 2017年12月
『アーサー物語』内山舜著 森鷗外・島村抱月監修 実業之日本社 1914年9月(世界名著物語第4編) 近事画報社 1995年3月 再版
『大日本帝国憲法と森鷗外』連沼啓介著(日本大学法科大学院 法務研究) 第14号 2017年1月(抜刷)
『頼田家日記』頼田豊刊 1961年
『博文館』太陽と近代日本文論 ドイツ思想・文化の受容と展開』林正吉著 勉誠出版 2017年5月
ほか(受入日誌)

展示のお知らせ

特別展
鷗外と旅する日本

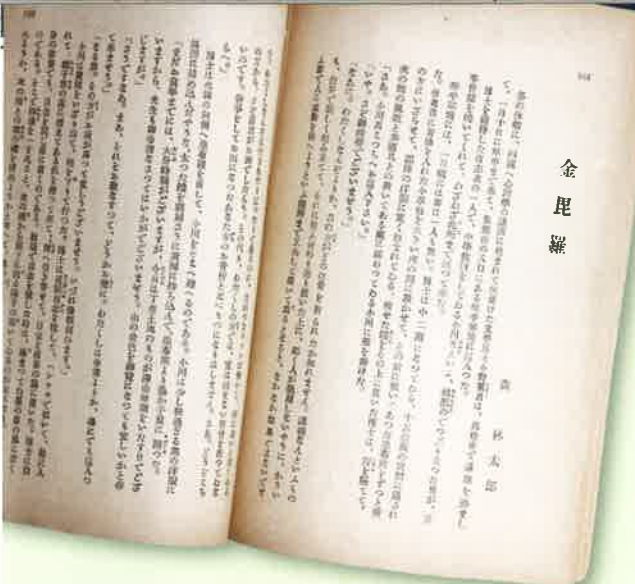
「天気もひどく好いから、どこへでも御一しよに行きませう。」（『青年』）

明治、大正期に活躍した森鷗外（陸軍軍医、作家は、北は北海道から南は九州まで日本各地に足を運んでいます。旭川、弘前、新潟、長野、大宮、横浜、京都、奈良、広島、小倉、熊本、琴平……多くは公務の旅でしたが、休暇に一人でもしくは友人、家族とともに温泉地や三崎、千葉の別荘に出かけることもありました。公務の合間にも、寺社や史跡を巡り、歴史に登場する著名人の墓を訪れました。こうした旅は、鷗外が日頃書物から取り入れた知識により深みを与え、後に作品の中にあられられました。

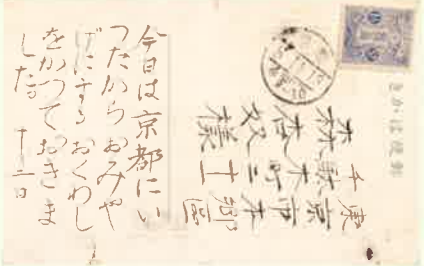
本展では鷗外が実際に訪れた地、『高瀬舟』『金毘羅』『阿部一族』など作品の舞台になった地を、鷗外の旅行記『北遊日乗』『みちの記』『北遊記』や日記、書簡などの資料などから紹介します。鷗外の生きた60年の間には日本全国に交通網が伸び、鷗外の旅も変化していきました。鷗外を道るべに全国をめぐると共に、現在につながる明治、大正の景色も紹介します。鷗外を道るべに全国をめぐると共に、現在につながる明治、大正の景色も紹介します。鷗外を道るべに全国をめぐると共に、現在につながる明治、大正の景色も紹介します。

『金毘羅』（『スバル』1年10号）
明治42年10月

金毘羅



鷗外筆名刺宛葉書 大正8年11月12日付



展示会場から

鷗外筆森家宛葉書

明治41年1月1日

[S01001]

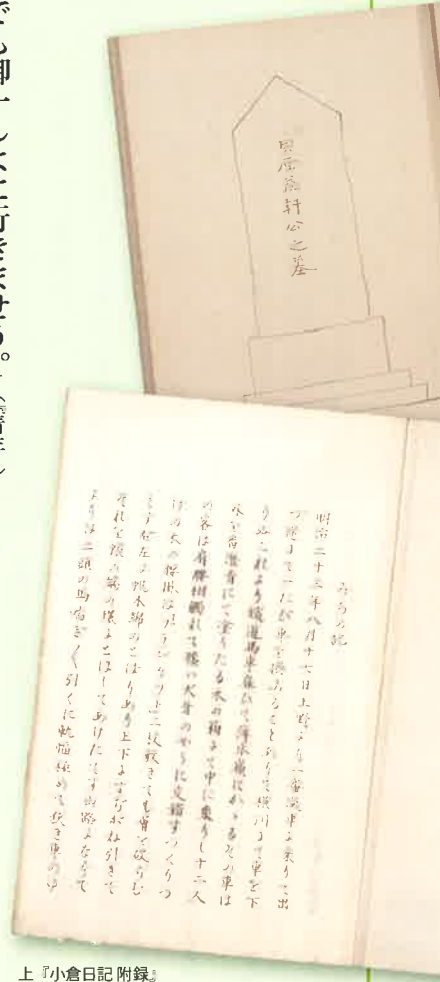


東京市本郷区駒込
千駄木町二十一番地
森様
此より二日金沢四日
濱寺六日普通寺九日十日
大坂といふ順序に候
帰休庵
湯の池や
魚あり雪に
暎暎す

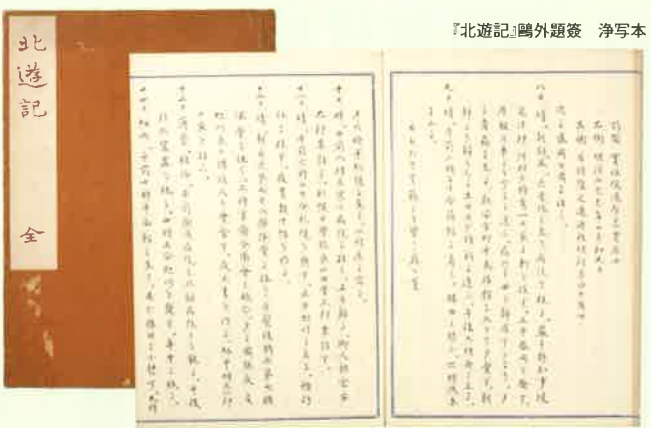
鷗外は、明治40年11月に軍医監兼陸軍省医務局長に就任し、同年末から翌年年初にかけて各師団の衛生状況視察のため出張しました。12月29日午前8時に東京を出発。同日午後4時に名古屋に着き、一泊した後31日午前3時に米原で北陸線に乗り換えて石川県の山代温泉に向かいました。山代温泉「軍医としての森鷗外」（昭和18年、文松堂書店）には、この出張に同行した部下・村山の談話として、道中の鷗外の様子が詳しく書かれています。

米原では二時間ばかり待合はせねばならなかった。宿屋で一寸なりとも採暖なさる様申上げたが、先生は「此処で沢山だ」と言つて他の乗客と共に駅の待合室で待合せられた。（中略）車中のお話で、歳末から年初にかけて金沢に行くのは師団当局の邪魔にもなるから、他の適当な処で暮さうとの御意図が分り、それは山代温泉が一番便利であらうと、いよくそれに一決した。

31日午後到大聖寺を経由して、夕方には山代温泉の宿屋に入りました。出張中、鷗外は自身の動向を伝える葉書を、連日のように家族に送りました。当館ではその一部を所蔵しています。正月に出された手紙は、山代温泉の絵葉書に書かれたものでした。村山は山代温泉滞在中に、鷗外から文学や俳句に関する史的観察についての意見を聞いたと述べています。鷗外は公務の傍ら、先人の墓所や史跡を訪れ調査をすることもあり、これらは後の歴史小説や史伝などに生かされました。



上『小倉日記附録』
下『みちの記』浄写本 明治23年8月17日～27日



『北遊記』鷗外題簽 浄写本

会期 ● 2018年
4月7日(土) - 7月1日(日)
【会期中の休館日】5月22日(火)、6月26日(火)
会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室1、2
開館時間 ● 10時～18時（最終入館は17時30分）
観覧料 ● 一般500円（20名以上の団体：400円）
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料 ※文京ふるさと歴史館入館券、ハンズレット押印入、友の会会員ご提示で2割引 ※その他各種割引がござります。詳細は記念館HPをご覧ください。

ショップ便り

現在ミュージアムショップでは、2018年1月に発行された『泡沫の歌 森鷗外と星新一をつなぐひと』を取り扱っています。
この本は、森鷗外の妹でありSF作家・星新一の祖母である小金井喜美子の作品を、星マリナ氏（新一の次女）が編纂したものです。二部構成になっており、第一部では喜美子が詠んだ短歌、第二部では喜美子の随筆がまとめられています。また、森鷗外と星新一の文章も交えながら、喜美子を通して二人のつながりにも触れられています。
喜美子の業績については、2016年に当館で開催した特別展「私」がわたしであること」図録でも紹介しています。



価格 1,001円(税別) 限定3000部
新潮社図書編集部

カフェ便り

鷗外の誕生日である1月19日を祝して、今年もモリキネカフェでは記念のお菓子ををご用意しました。文京区にある、抹茶とあずきの和洋菓子の店「松右衛門」の「抹茶アイスクリーク」を販売しました。アイスなのにまるでムースのような滑らかな舌触りを、皆さまに楽しんでいただきました。
春の特別展には、好評につき昨年に引き続きコーヒーに合う練りきりをご用意いたします。お楽しみに！

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。事前申込制、定員50名です。申込方法は7頁をご覧ください。

「旅の楽しみ、ヨーロッパ採集」

講師 林丈二氏
（路上観察家、イラストレーター）
日時 6月10日(日) 14時～15時30分
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 無料(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)
申込締切 5月25日(金) 必着

「森鷗外と鉄道の旅」

講師 老川慶喜氏
（跡見学園女子大学教授、立教大学名誉教授）
日時 6月16日(土) 14時～15時30分
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 無料(参加票と本展の観覧券(半券可)が必要)
申込締切 6月1日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
4月18日、5月16日、6月20日
いずれも水曜日14時～(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要です)
★子ども向けギャラリートーク
小学1～3年生を対象とした展示解説を行います。
5月20日(日) 11時～(30分程度)
申込不要(高校生以上の方は、展示観覧券が必要です)

地域情報

湯島天満宮大祭

2018年5月25日(金)～27日(日)
この例大祭は、菅原道真の命日にちなみ25日前後に全国的に開催されている「天神祭」のひとつで、湯島天満宮では毎年5月25日に開催されています。2018年は2年に一度の本祭にあたり、26日の神幸祭では御風籠が氏子町内を巡ります。27日には4年に一度の本社神輿が、梅をあしらった揃いの半纏を着た担ぎ手たちによって渡御されます。



2010年の大祭の様子
写真提供：文京区観光協会

期間中は、東京都無形文化財の松本源之助社中の江戸里神楽や和太鼓の演奏など、様々な催しものが行われます。境内に出店される屋台も併せて、一日中楽しめるお祭りです。湯島天満宮は、当館最寄の東京メトロ千代田線千駄木駅から2駅の、湯島駅3番出口から徒歩2分です。道中には鷗外作品ゆかりの場所も多く、初夏の気候に誘われて、文学散歩がら歩いてみるのも良いかもしれません。

コラム 文学は誰のものか？——文化資源の活用と地域連携

石田仁志（東洋大学教授）

文京区立森鷗外記念館が2017年11月1日で開館5周年を迎えた。喜ばしいことである。1962年開設の区立鷗外記念本郷図書館から数えるなら、まさに地元の千駄木に根差した文学記念館と言える。個人作家の文学記念館が、その作家の業績を顕彰し、貴重な遺産として後世に継承していくという目的を持つているのは当然である。その点で、森鷗外記念館は「森鷗外」のための文学記念館であり、そこにあるのは「森鷗外」の世界に他ならない。しかし、「文学」とは決して作者だけのものではない。いや、フランスの哲学者ロラン・バルト（1915-1980）の言葉を借りるなら、あるテクストの意味を決めるのは「作者」ではなく、そのテクストを編み上げている「ことば」たちであり、享受者である「読者」こそが解釈の快楽を生み出すのである（『エッセ・クリティック』）。「森鷗外」という存在そのものを一つのテクスト（文化的な「織物」）だと考えるなら、「森鷗外」の世界は森鷗外だけのものではないということになる。文学記念館から私たちがどのような「快楽」を紡ぎ出すか、言い換えれば、記念館は私たちにどのような「快楽」の可能性を示してくれるのか、そこに、私たちに開かれた文学記念館の意義があるのだろう。そして、「文学」を生み出した「場」としての地域（ここでは文京区）との結びつきを考えることは大切である。文学記念館は「文学」あるいは「芸術」という文化資源を活用して、地域と結びつき、新たな価値を生み出していかねばならないものでもある。そしてそれは大学の社会的な意義にも結びつく。

我田引水のような話題で恐縮だが、2017年10月12月にかけて、東洋大学社会貢献センターが、森鷗外記念館との連携公開講座を、開館5周年記念の特別展「明治文壇観測—鷗外と慶応3年生まれの文人たち」に合わせて連続5回にわたり開催した。この講座では、①「日本文学を開拓する眼」尾崎紅葉・石橋思軒、②「時代を見つめる眼（正岡子規・夏目漱石）」石田仁志（東洋大学文学部教授）、③「美術を支える眼（藤島武二）」岩切信一郎（美術史家）、④「歴史を見つめる眼（幸田露伴）」出口智之（東海大学文学部准教授）、⑤「古い芝居と新しい演劇（三木竹二）」神山彰（明治大学文学部教授）という形で、表現史、交友関係、美術、歴史、演劇といった多様な側面から森鷗外の文学世界の広がりや深さを学んでもらった点に大きな特徴があった。

東洋大学としては初めて地元の文化施設と協働で開催する講座で、手探りの部分が多かったが、蓋を開けてみれば、定員の2倍以上の応募者があり、大盛況となった。森鷗外の人気の高さに改めて驚かされたが、受講者は大学と記念館の両方で講座を受け、新たな刺激を得たようである。初めて記念館にきて地元の大学に足を運んだという人がかなりいた。地域連携という点では、まずは地元の施設に足を運んでもらうことが不可欠で、そのうえで、そこにある文化資源の意義というものを理解してもらい、また、それが自分たちの生活のすぐ近くにあるものとして体感してもらうことが大切なのだろう。大学は講師や受講生という〈知〉

の資源を地域に提供し、記念館は収蔵品や展示を含め、「文学的な〈財〉」の資源を提供する。そのうえで、今回のように「森鷗外」の世界を外に広げて見せることができれば、文化資料の活用方法も地域連携の在り方もさらに広がってこよう。この連携公開講座は、2018年度秋季も継続されることになっている。次のテーマは改めて発表されるが、私としては森鷗外記念館との連携を基盤に、もつと文京区ゆかりの文人たちという文化資源を、大学という教育の場と連携して活用できたらとは願っている。

ちなみに文京区はホームページの「文京ゆかりの文人」というコーナーで実に56名の文人を紹介している。おそらくは日本で一番、ゆかりの文人が多いのではないかと考えるが、もちろん、まだ紹介しきれていない文人も多いようだ。例えば、亡くなった妻との小石川植物園での「コマを描いた名小品」同栗（1907）の筆者の寺田虎彦は含まれていない。そして私が専門に研究している小説家の横光利一（1898-1947）もまた含まれていない。彼は大正9年から13年まで小石川の初音町（詳しい場所は未詳で過ごし、関東大震災にはここで被災している。そのような初音町での生活を彼は「街の底」（1925）や「悲しみの代価」（死後に川端康成が題名を付して公開した）などに残している。

その横光利一にかかわって、横光利一文学会が2018年3月17日に日本近代文学館で新時代に向けた「文学」の価値を考えるシンポジウム「文化資源（コンテンツ）としての文学」を行う（このNEWSが発行された）などに残している。

石田仁志
いしだ・ひとし

1991年、東京都立大学人文科学研究科国文学修士。東洋大学文学部日本文学文化学第1部学科長などを歴任し、2008年から同大学教授。現在の所属学科は国際文化コミュニケーション学科。日本近代文学学会評議員、横光利一文学会運営委員・評議員などを務める。



東洋大学での連携公開講座（第3回）の様子

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

5月26日(土) 11:00～12:30 鷗外講座応用編 第1回 「〈第三項〉と鷗外初期三部作の新しい読み方①」 講師：田中 実氏（都留文科大学名誉教授） 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：5月11日(金)必着 今年の鷗外講座は応用編として、「明治150年」をキーワードに幅広い角度からお話しいただきます。全6回開催。	6月16日(土) 14:00～15:30 展示関連講演会「森鷗外と鉄道の旅」 講師：老川慶喜氏（跡見学園女子大学教授、立教大学名誉教授） 会場：講座室 料金：無料 ※要本展観覧券（半券合） 定員：50名 申込締切：6月1日(金)必着
6月9日(土) 11:00～12:30 鷗外講座応用編 第2回 「〈第三項〉と鷗外初期三部作の新しい読み方②」 講師：田中 実氏（都留文科大学名誉教授） 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：5月28日(月)必着	6月23日(土) 11:00～12:30 鷗外講座応用編 第3回 「鷗外の多面的な活動① ジャーナリストとしての鷗外」 講師：松木 博氏（大妻女子大学短期大学部教授） 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：6月11日(月)必着
6月10日(日) 14:00～15:30 展示関連講演会「旅の楽しみ、ヨーロッパ採集」 講師：林 文二氏（路上観察家、イラストレーター） 会場：講座室 料金：無料 ※要本展観覧券（半券合） 定員：50名 申込締切：5月25日(金)必着	7月14日(土) 11:00～12:30 鷗外講座応用編 第4回 「鷗外の多面的な活動② 翻訳家としての鷗外」 講師：松木 博氏（大妻女子大学短期大学部教授） 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：6月25日(月)必着
6月6日(水) 鷗外文学ツアー「鷗外文学散策～さいたま編」 詳細はホームページをご覧ください。	4月23日(月)、5月23日(水)、6月23日(土)、7月23日(月) ふみ 「文の京で文を出そう」◎ 毎月23日（ふみの日）に手紙に関するイベントを開催します。詳細はホームページをご覧ください。

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様（はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで）、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名（ふりがな）・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名（ふりがな）・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@morioagai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

【ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。】

活動報告

開館5周年記念シンポジウム

「深読み!? 森鷗外——鷗外とピグマリオン・コンプレックス」
1月20日、開館5周年記念事業の締めくくりとして、シンポジウムを開催しました。「ピグマリオン・コンプレックス（ピュグマリオンズ）」とは、狭義には「人形への偏愛」を、広義には「女性を人形のように取り扱う」「自分好みに教育すること」を指す用語です。当シンポジウムは、関連展示「The Silent Woman」の作者であり、「ピグマリオン・コンプレックス」を可視化したとも言える菅実花氏の作品を手がかりに、島村輝氏と藤木直実氏とが鷗外作品を新たな視点で読み解こうというものです。

シンポジウムは、まずそれぞれ30分程度の登壇の後、小泉浩一郎氏を統括に登壇者全員で討議を行うという流れで進みました。菅氏の登壇では、「The Silent Woman」や前作「The Future Mother」などに通底する、医療の進歩や技術の発展で身体や生命をある程度「操作」できるようになった現代において、その帰結としての「妊娠するアンドロイド」誕生の可能性と、それが一種の「理想的な」存在であるかもしれないということについて述べられました。

藤木氏は、鷗外の妻・志げの作品『波瀾』『あだ花』や、鷗外の『魔睡』『鼠坂』を取り上げ、近代文学における「妊娠」「出産」などの表象やその背景にある社会問題について鋭い視点で語られました。島村氏は「舞姫」の主人公・太田豊太郎のモデル問題に着目。鷗外と親交の深かった洋画家・原田直次郎と仮定した上で、原田の作品『風景』が両親（マリア、ヨセフ）を不在とした聖家族像であるのではないかと、原田の経歴などを交えながら提議されました。

いつもより少し先鋭的な鷗外作品の「深読み」に、会場からも様々な質問が飛び交いました。小泉氏は、鷗外作品が現在、もしくは将来的に社会が抱えるであろう問題について、考えるのに耐える作品だということを感じたと締められました。



- 【登壇（記載は登壇順）】
- 菅実花氏（東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻博士後期課程）
- 「未来の母としての」
- 「妊娠するアンドロイド」をめぐって
- 藤木直実氏（日本女子大学非常勤講師）
- 「人形の反乱 鷗外と生命再現の政治学」
- 島村輝氏（フェリス学院大学教授）
- 「マリアのいない聖家族」
- 原田直次郎「風景」と鷗外の独逸三部作
- 【統括】
- 小泉浩一郎氏



シンポジウム関連展示「The Silent Woman」1月13日～28日
撮影：菅実花

2018年度前期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

4月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

5月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

6月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

7月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

8月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

9月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

コレクション展「鷗外・ミーツ・アーティスト—観潮楼を訪れた美術家たち」
1月13日(土)～4月1日(日)

特別展「鷗外と旅する日本」
4月7日(土)～7月1日(日)

コレクション展「鷗外と歩く・TOKYO」(仮称)
7月6日(金)～9月30日(日)

● 休館日

編集後記

「鷗外・ミーツ・アーティスト—観潮楼を訪れた美術家たち」では、前回のコレクション展に引き続き展示ミニガイドを作成しました。特別展で作成している展示図録とは少し違い、図版はないものの、展覧会内の解説パネルや年表、資料キャプションのほぼ全てを掲載しています。会期終了後も、売り切れの場合を除き当館ショップで販売しています。また、これまで開催した特別展の図録も継続販売中です。展覧会を見逃した方も是非お買い求めいただき、ご自宅でも展覧会をお楽しみください。

ご自宅で森鷗外記念館をお楽しみいただく方法は他にもあります。当館ホームページでは、これまで発行したNEWSを全てご覧いただくことが可能です。また「館蔵品紹介」コーナーでは、館蔵資料の記念品、書簡、原稿などから数点ずつをご紹介します。当館の展示は資料保護のため定期的に資料を入れ替えているので、時期によってはホームページで見られないものも。ホームページをチェックして、お気に入りの資料を見つけてください。



●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木 1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum